

# 南米 [ブラジル]



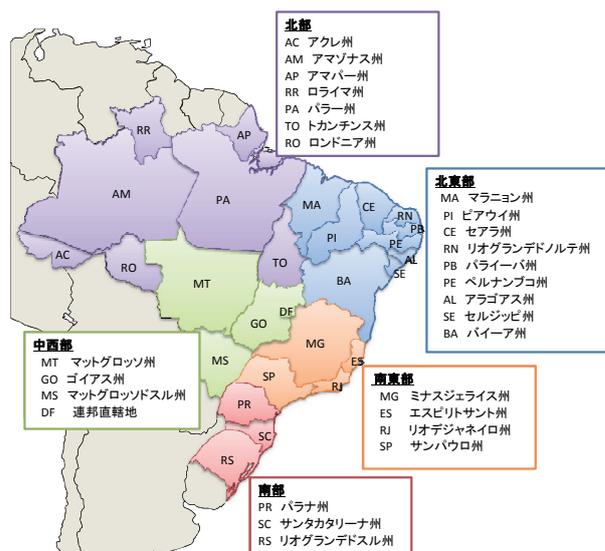
## 1 農・畜産業の概況

最新のセンサス（2006年）によると、ブラジルの農業経営体520万戸の所有面積は3億5490万ヘクタールで、このうち農用地が7670万ヘクタール、牧草場が1億7230万ヘクタールである（表1）。2013/14年度（10月～翌9月）には、農用地の75%に当たる5779万ヘクタールが穀物生産に向けられた結果、穀物生産量は2億884万トン（前年度比7.9%増）となった。

畜産分野では、2013年の生産量は、牛肉が米国に次ぐ世界第2位、鶏肉は米国、中国に次ぐ第3位、豚肉は中国、EU（28カ国）、米国に続いて世界第4位を記録した。輸出量は、牛肉、鶏肉は世界第1位、豚肉は4位となった。

2013年の農産物（農畜産物、林産物および水産物）輸出額は、年間を通じてドル高・レアル安で推移した為替相場により輸出が好条件となり、1000億米ドル（前年比4.3%増）と過去最高を記録した。同年の農産物輸入額を差し引いた貿易黒字は829億米ドルとなり、農業部門が対外収支に重要な役割を果たしている。

図1 ブラジルの地図



資料：機構作成

表1 農場面積と農場数の推移

（単位：千戸、千ha）

	1970	1975	1980	1985	1996	2006
農場数	4,924	4,993	5,160	5,802	4,860	5,204
農場面積	294,143	323,894	364,853	374,925	353,611	354,865

資料：ブラジル地理統計院（IBGE）

## 2 畜産の動向

### (1) 肉牛・牛肉産業

ブラジルの肉牛生産は、牧草地を利用した放牧肥育が中心で、耐暑性に優れたゼブー系ネローレ種が主に飼養されている。近年は、穀物生産が増加し放牧面積が減少傾向にあることから、フィードロットによる飼養管理も拡大している。

2008年に米国に端を発した国際金融危機以降、ブラジルの大手食肉企業の一部では、買収、合併による事業拡大を通じた経営合理化を図る動きが見られた。こうした中、ブラジルに本社を構える食肉最大手のJBS社は、

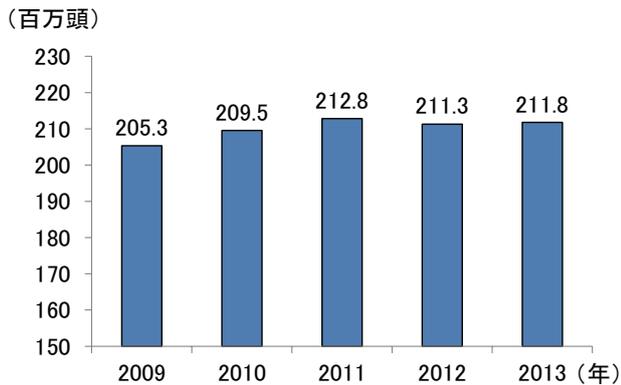
グローバルな拡大戦略により、企業体力を高め、世界最大の食肉企業に成長している。

ブラジルでは、長年、口蹄疫対策に取り組んだ結果、多くの地域がワクチン接種清浄地域となった。2007年には、南部のサンタカタリーナ州が、国際獣疫事務局（OIE）から同国初の口蹄疫ワクチン不接種清浄地域のステータスを取得した。また、BSEは、2012年および2014年に非定型が確認されたものの、その清浄性が2015年9月時点でOIEから「無視できるリスク」と評価されている。

①飼養動向

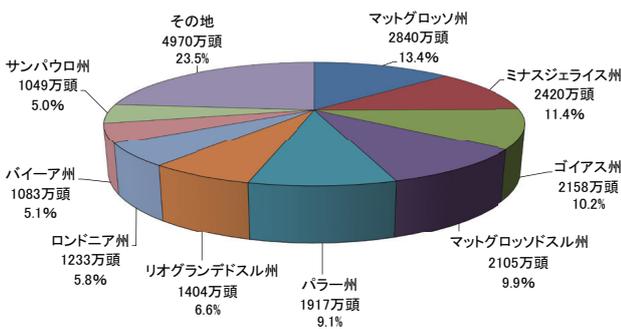
ブラジル地理統計院（IBGE）によると、2013年の牛飼養頭数は、2億1176万頭（前年比0.2%増）となった（図2）。州別で見ると、マットグロッソ州が最も多く、次いでミナスジェライス州、ゴイアス州、マットグロッソドスル州と続いた。肉用牛は、従来は、主に大消費地を含む南東部を中心に飼養されていたが、需要の高まりを受け、地価が安く広大な中西部での飼養が拡大している（図3）。

図2 牛飼養頭数の推移



資料：IBGE

図3 州別飼養頭数



資料：IBGE

②牛肉の需給動向

ア 生産

ブラジル国家食糧供給公社（CONAB）によると、2013年の牛肉生産量は899万トン（前年比2.7%増、枝肉重量ベース）となった（表2）。飼料穀物価格の高騰により、配合飼料を多給される豚肉や鶏肉の価格が上昇した一方、牧草肥育が主体である牛肉は相対的に割安となり、国内需要が高まったことに加え、好調な牛肉輸出が増産を後押しした。



写真：ゴイアス州の放牧風景

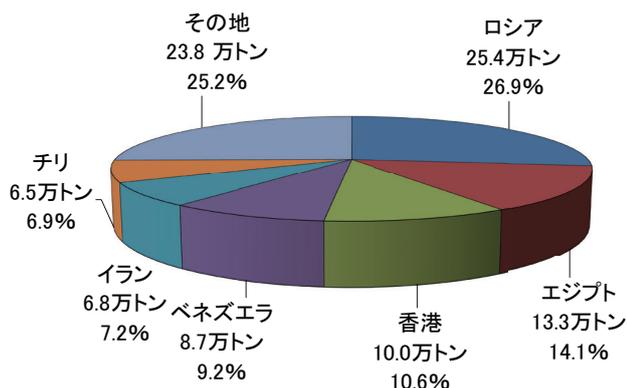
イ 輸出

CONABによると、2013年の牛肉輸出量は、182万2000トン（前年比8.2%増）と大幅増となった。

2012年12月にブラジルで初めてのBSE（非定型）が確認された影響で、一部の国ではブラジル産牛肉の輸入停止措置を講じたものの、ほとんどの国が短期間で輸入を再開するなど影響は限定的であった（日本は、BSE発生前は、加熱牛肉のみ輸入可能であったが、BSEの発生・確認を受け、2015年9月時点で全てのブラジル産牛肉の輸入を禁止している）。

国別輸出内訳を見ると、最大の輸出先であるロシアが、衛生問題を理由とした2011年からの禁輸措置を解除したことで大幅に増加したほか、香港やベネズエラなども旺盛な需要から顕著な増加を記録した。

図4 牛肉（冷凍、冷蔵）の輸出先国（2013年）



資料：SECEX  
注：製品重量ベース

### ウ 消費

2013年の消費量は、722万7000トン（前年比1.4%増）とされ、前述のとおり、牛肉が他の食肉と比べて相対的に割安感があったことから、増加した。また、1人当たり年間消費量は36.0キログラム（同0.6%増）となった（表2）。

表2 牛肉需給の推移

（単位：千トン、kg）

	2009	2010	2011	2012	2013
生産量	8,474	8,783	8,448	8,752	8,992
輸入量	41	41	45	60	57
輸出量	1,767	1,702	1,495	1,684	1,822
1人当たりの消費量	34.9	36.4	35.5	35.8	36.0

資料：ブラジル国家食糧供給公社（CONAB）

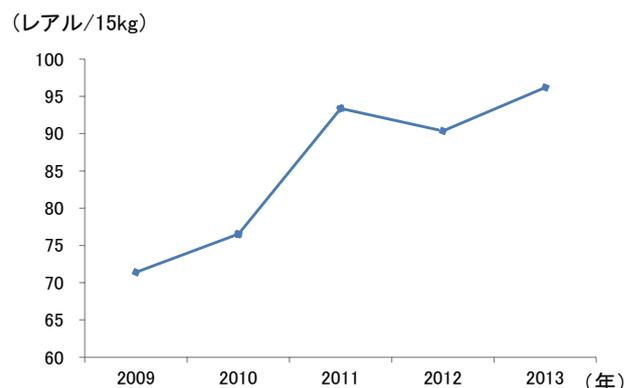
注1：枝肉重量ベース。

2：2013年は、暫定値。

### ③牛肉の価格動向

ブラジルでは、牛の生産者販売価格は生体15キログラム単位（アローバ）で示される。2013年の肥育牛の年間平均価格（マツグロッソドスル州カンポグランジ市場）は、1アローバ（15キログラム）当たり96.2レアル（前年比6.6%高）であった（図5）。牛肉小売価格（ランプ）は、1キログラム19.6レアルと前年比0.6%安となった。

図5 肥育牛の生産者販売価格の推移（カンポグランジ市場）



資料：CONAB

## (2) 養鶏・鶏肉産業

ブラジルブロイラー用ひな生産者協会（APINCO）によると、2013年の鶏肉生産量は、国際金融危機の影響が緩和され内外の需要は堅調となったものの、生産コストの上昇を受け、前年からわずかに減少した。

なお、2011年7月に正式に承認された鶏肉生産国内1位のペルヂゴン（Perdigao）社と2位のサジア（Sadia）社の合併後の新会社ブラジルフーズ（BRF）社は、国内鶏肉生産量の3割以上、輸出量の5割以上を占めるなど、同国の鶏肉産業を大きくけん引している。

また、国内1位の食肉企業であるJBS社は、2013年にマルフリグ（MARFRIG）社傘下のセアラ（SEARA）社を買収し、鶏肉・豚肉部門を強化した。

### ①ブロイラーの需給動向

#### ア 生産動向

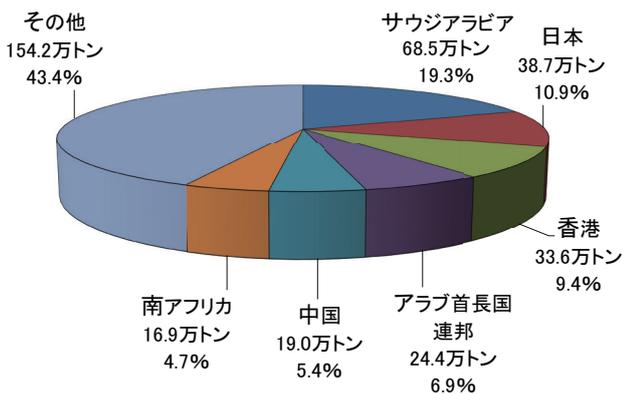
2013年のブロイラー用ひなふ化羽数は、輸出が好調に推移したことを受け、61億5657万羽（前年比2.5%増）となった。しかし、鶏肉生産量は、飼料給与量を減らしたことで1羽当たりの生体重量が減少したことから、1260万2626トン（同0.3%減）となった。

## イ 輸出

ブラジル開発商工省貿易局（SECEX）によると、2013年の鶏肉輸出量は、生産量が減少したものの、主要輸出国からの需要が堅調であったことを受け、355万トン（前年比0.2%減）とわずかな減少にとどまった。このうち、部分肉が206万8032トン（58.2%）、丸どりが148万4413トン（41.8%）となった。輸出先国では、サウジアラビア向けが全体の19.3%、次いで日本向けが10.9%、香港向けが9.4%となった（図6）。5位の中国向けは、前年から減少し全体の5.4%となった。

輸出額は、為替相場がドル高・レアル安傾向で推移したものの、旺盛な需要を受け平均輸出単価が上昇したことから70億384万米ドル（同4.0%増）と、増加した。

図6 鶏肉の輸出先国（2013年）



資料：SECEX

## ウ 消費

2013年の1人当たり年間鶏肉消費量は、45.3キログラム（前年比1.9%減）となった。これは、主に上半期の生産コストの上昇を受け、各部位ともに価格が2～3割上昇したことによる。

## ②プロイラーの価格動向

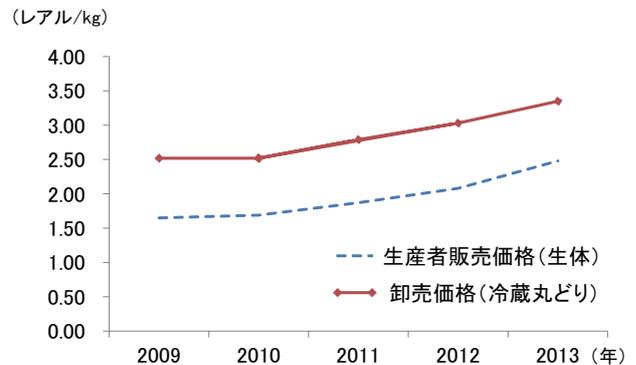
### ア 生産者販売価格

CONABによると、2013年の生産者販売価格（サンパウロ州）は、1キログラム当たり2.48レアル（前年比19.2%高）となった（図7）。これは国際的な穀物相場の上昇を受け、国内の飼料穀物価格も上昇し、併せて人件費も引き続き上昇したことから、生産コストはかなり大きく上昇したことによる。

### イ 卸売価格

2013年の丸どりの卸売価格（サンパウロ州）は、同3.35レアル（同10.6%高）となった（図7）。

図7 プロイラー価格の推移（サンパウロ州）



資料：CONAB

### 3 飼料穀物

ブラジルの2013/14年度（10月～翌9月）のトウモロコシの生産量は世界第3位、輸出量は同2位であった。2012/13年度の輸出量は、干ばつの影響で大幅な減産を記録した米国を抜いて世界最高を記録したものの、2013/14年度は第2位となった。

ブラジルのトウモロコシの作付けは、夏作（第1期作）と冬作（第2期作）の年2回行われ、2013/14年度の第1期作はミナスジェライス州（南東部）、第2期作はマットグロッソ州（中西部）が最大の生産地となった。パラナ州をはじめとした伝統的に生産が盛んな南部3州は、2013/14年度に同国で生産されたトウモロコシ（8005万トン）の31.1%を占めた。一方、近年、生産量を伸ばしている中西部3州（マットグロッソ州、マットグロッソドスル州、ゴイアス州）は、同42.8%を占めた。

#### ①主要政策

2013/14年度（7月～翌6月）は、農務省（MAPA）が管轄する農業予算として、過去最大規模となる1361億レアル（前年度比18.0%増）が措置された（表3）。

この予算は、主に、食料の安定供給や生産者の競争力強化などを目的とした融資に向けられる。

表3 農業予算の推移

（単位：億レアル）

農業年度	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
総予算額	925	1,000	1,072	1,153	1,361
営農・販売融資	662	756	802	890	976
投資融資	140	180	205	263	384
特別融資	123	64	65	-	-

資料：MAPA

注：「特別融資」は、砂糖・エタノール製造施設の建設など特定産業向け。

営農・販売融資については、976億レアル（同9.7%増）が予算措置され、政府が年利5.5%で営農融資を行うための資金となった。営農融資は農畜産物の生産や加工に係る経費を対象としており、今年度の融資限度額は1農家当たり前年度の80万レアルから100万レアルに引き上げられた。また、連邦政府が定める農畜産物の最低価格を基礎として農畜産物を担保に行われる販売融資に係る融資限度額は、同160万レアルから200万レアルに引き上げられた。さらに、近代化やかんがいに向けた融資については、利息を前年度の年利5.5%から3.5%に引き下げた。

投資融資については、384億レアル（同46.1%増）の予算が措置された。同予算では、温室効果ガスの削減を図り持続的農業を拡大する低炭素排出型農業プログラム（ABC）と、中規模農業者支援国家プログラム（PRONAMP）が重要課題として継続されている。ABCについては、45億レアル（同32%増）の予算が措置され、年利5.0%、1戸当たり融資限度額は100万レアルに設定された。同プログラムでは、①有機農業プログラムへの適応②牧草地の回復③農業・畜産・森林を一体として推し進めるブラジル独自のインテグレーションシステムの導入、を奨励している。また、PRONAMPについては、132億レアル（同18.4%増）が予算措置され、年収160万レアル未満の農家に対しては、年利4.5%で最大35万レアル（返済期間12年）の投資融資が盛り込まれた。

2013/14年度の農業予算について、関係団体は融資額が農業部門の要求を下回るものではあるが、十分な規模と受け止めており、予算を支持する声が多くを占めている。一方で、融資額の増加や利率の引き下げよりも、生産者の資産を保護する政策が重要とする意見や、生産者が債務を負うため、融資の利用が阻まれているという現状を訴える声、さらに、農業開発と環境規制との間に生じる問題の解決を求める声もある。

## ②飼料穀物の需給動向

2013/14年度（10月～翌9月）のトウモロコシ生産量は、8005万トン（前年度比1.8%減）と過去最高を記録した前年度から減少した（表4）。

同年度第1期作のトウモロコシ生産量は、収益性に優る大豆の作付面積拡大のあおりを受けて縮小したほか、南東部で高温乾燥が発生したことから単収が悪化し、同8.5%減の3165万トンとなった。

一方、第2期作のトウモロコシ生産量は、作付面積が拡大したことに加え、天候に恵まれたことから、過去最高の4840万トン（同3.1%増）となった。特に、最大生産州のマトグロッソ州で良好な天候を記録したことが全体の生産を押し上げた。

これにより、総生産量に占める第2期作の割合は、前年度に続き60.5%を占めた。

輸出量は、2012年に記録的な干ばつで減少した米国の生産が回復したことで大幅に減少し、主に輸出に仕向けられる第2期作の生産量が好調であったものの、2092万トン（同20.1%減）となった。国内へは5465万トンが供給され、1184万トンが期末在庫として次年度に繰り越された。

2013/14年度の大豆の生産量は、8612万トン（同5.7%増）を記録した（表5）。これは大豆の国際相場が世界的な需要増を受け高値で推移し、収益性が良好であったことから、作付面積が3017万ヘクタール（同8.8%増）と拡大したことによる。

最大の生産州であるマトグロッソ州（国産生産量の約3割）では、作付面積、単収がそれぞれ前年度を上回った。一方、2013年末から2014年2月中旬にかけて、南部、南東部を中心に高温乾燥による生育被害が発生したことで、2013/14年度の国内平均単収は前年度比2.9%減となった。

なお、輸出量は4569万トン（同6.8%増）で、国内消費量は4033万トン（同4.2%増）となった。また、期末在庫は142万トンと前年度からほぼ倍増した。

表4 トウモロコシの需給表

(単位：千トン)

区分/年度	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
期首在庫	7,113	5,589	5,419	4,434	6,563
生産量	56,018	57,407	72,980	81,506	80,052
輸入量	392	764	774	911	791
消費量	46,968	49,029	52,425	54,114	54,645
輸出量	10,966	9,312	22,314	26,174	20,925
期末在庫	5,589	5,419	4,434	6,563	11,836

資料：CONAB

表5 大豆の需給表

(単位：千トン)

区分/年度	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14
期首在庫	674	2,607	3,017	444	740
生産量	68,688	75,324	66,383	81,499	86,121
輸入量	118	41	267	283	579
消費量	37,800	41,970	36,754	38,694	40,333
輸出量	29,073	32,986	32,468	42,792	45,691
期末在庫	2,607	3,017	444	740	1,416

資料：CONAB

## ③飼料穀物の価格動向

2013年のトウモロコシ価格（サンパウロ州）は、60キログラム当たり24.14リアル（前年比7.3%安）と、米国の生産回復に伴う国際相場の下落に連動して低下した（表6）。

また、同年の大豆価格は、同58.4リアル（同0.7%安）となった（表7）。

表6 トウモロコシ価格の推移（サンパウロ州）

(単位：リアル/60kg)

区分/年	2009	2010	2011	2012	2013
生産者販売価格	18.11	17.7	26.33	26.03	24.14

資料：CONAB

表7 大豆価格の推移（サンパウロ州）

(単位：リアル/60kg)

区分/年	2009	2010	2011	2012	2013
生産者販売価格	45.6	37.3	42.9	58.8	58.4

資料：CONAB